

平城京右京一条二坊四坪・西一坊大路・一条南大路の調査 —第565次

1 はじめに

本調査は、奈良文化財研究所本庁舎敷地内における学術調査である。本調査では、同敷地内でおこなわれた第530・546・560次調査（『紀要 2016』）の成果を受け、一条南大路より南方の西一坊大路周辺の様相をあきらかにすること、敷地西北部の右京一条二坊四坪の様相をあきらかにすることを目的とした。

調査地は平城京西一坊大路、一条南大路、右京一条二坊四坪にあたり、北区（南北10m、東西21m）、中区（南北6m、東西15m）、南区（南北5m、東西6m）の3つの調査区を設定した。調査面積はあわせて360㎡である。調査は2016年3月22日に開始し、5月16日に終了した。

2 基本層序

北区は現地表から旧建物造成土（厚さ約1m）、旧耕土・床土（0.3～0.5m）、中世の遺物を含む包含層（暗褐色砂質土・黄褐色砂質土、0.1～0.4m）が堆積する。それより下位は、調査区東部では奈良時代の整地土層（暗褐色粘質土、約0.1m）が堆積し、地山（黄褐色粘土）に達する。調査区西部では沼状堆積SX3219上面に達する。遺構検出は奈良時代の整地土上面とSX3219上面でおこなった。遺構検出面の標高は68.4～69.0mである。

中区は現地表から第530次調査区埋戻土および旧建物造成土（厚さ約2.2m）、中世の遺物を含む包含層（暗褐色土・褐色土、約0.2m）が堆積し、奈良時代の灰色砂層（0.2～0.4m）と大路の路盤となる盛土（黒色土、0.7m以上）に達する。遺構検出は奈良時代の灰色砂層上面でおこなった。遺構検出面の標高は67.4～67.7mである。

南区は現地表から旧建物造成土（厚さ約1.2m）、旧耕土・床土（約0.5m）、中世の遺物を含む包含層（褐色土、約0.4m）が堆積し、奈良時代の整地土（0.1～0.3m）と大路の路盤となる盛土（黒灰色土・黒色土、約0.5m）と盛土下位の敷粗朶層に達する。遺構検出は奈良時代の整地土上面でおこない、断割調査によって敷粗朶層上面まで確認した。遺構検出面の標高は67.6～67.7mである。

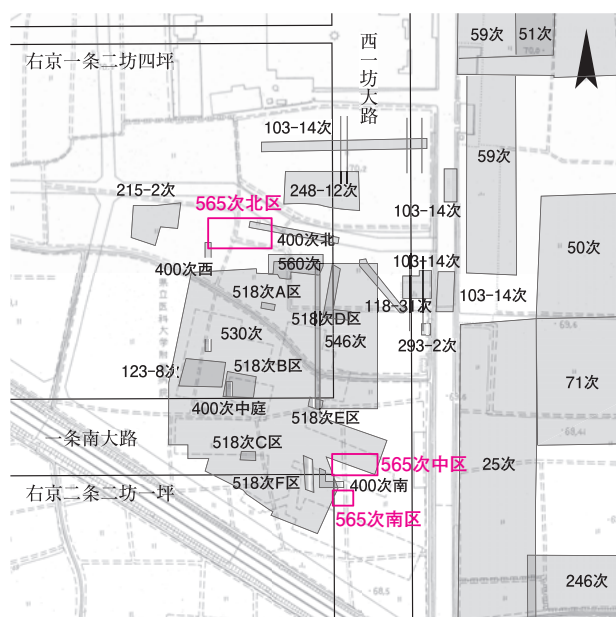


図264 第565次調査区位置図 1 : 3000

3 検出遺構

北 区

柱穴群SX3391 調査区東部で検出した柱穴群。8基を検出したが建物としてまとまらない。方形の掘方でいずれも一辺0.4～0.6m、深さ0.2～0.4mと小規模である。

下層柱穴SX3392 調査区中央で検出した柱穴1基。奈良時代の整地土に覆われている。東西0.7m、南北0.5m以上の方形の掘方で、深さ0.4mである。

沼状堆積SX3219 調査区西部で検出した沼状堆積。第530次調査区から続く。幅約9m、深さ0.8mである。西肩が緩やかに傾斜するのに対し、東肩の傾斜は急である。埋土は大きく3層に分かれ、堆積層である暗灰黄色粘土層と埋立土である灰色粘質土層（下層）および灰色砂質土層（上層）である。SX3219の最深部では木の根を検出し、これが灰色粘質土層により一気に埋まっていた。さらに、この木の上部が灰色砂質土層により削られており、灰色粘質土層と灰色砂質土層の埋め立てには時間差があった可能性が考えられる。灰色砂質土層からはまとまった量の土器と少量の瓦片が出土した。なお、SX3219は埋め立て後も湿地状を呈しており、上面で瓦器を含む南北溝SD3393を検出した。

南北溝SD3215 調査区中央で検出したSX3219の堆積以前に掘削された南北方向の大溝。東肩はSX3219と同位置にあり、西肩はSX3219により削られている。埋土は有機質を含む黒褐色粘質土。東肩の検出のみにとどめており、幅と深さは不明である。

中 区

西一坊大路西側溝SD3385 調査区西南部で検出した。西肩は削平されている。新古2時期を確認した。古段

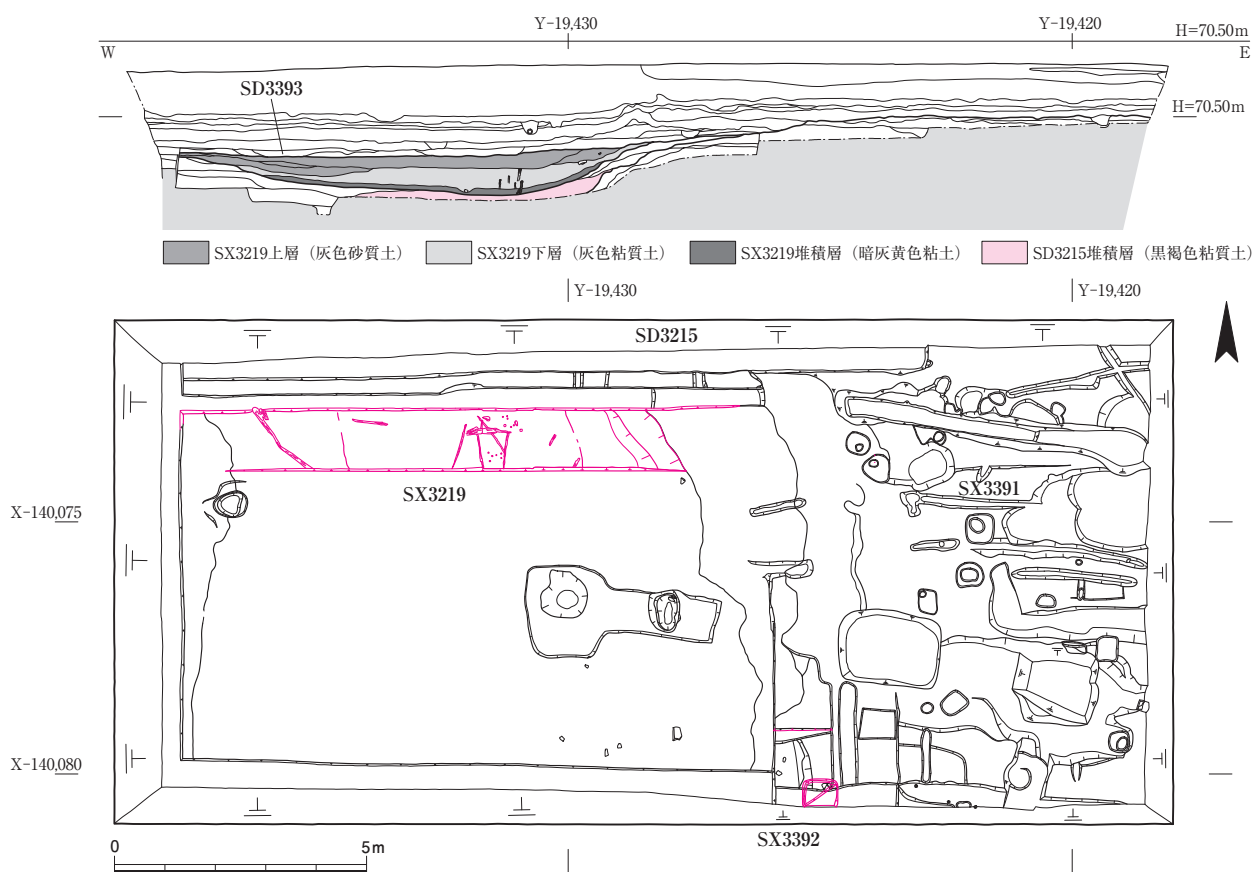


図265 第565次調査 北区遺構図・土層図 1 : 150

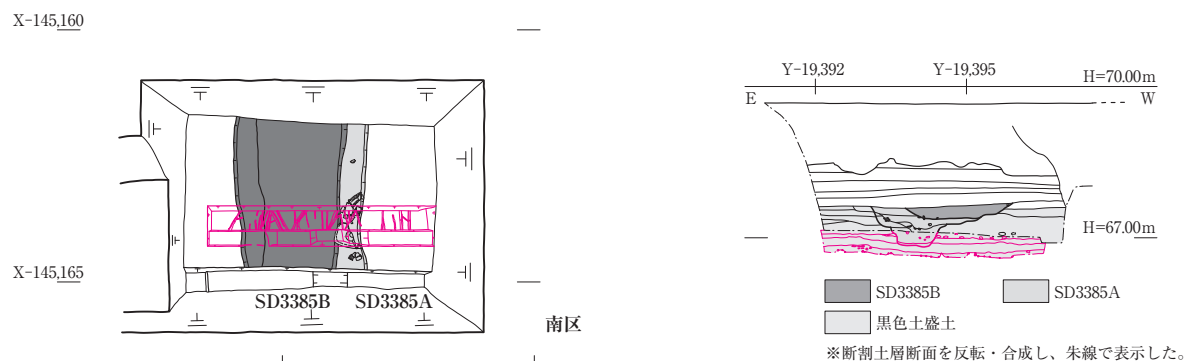
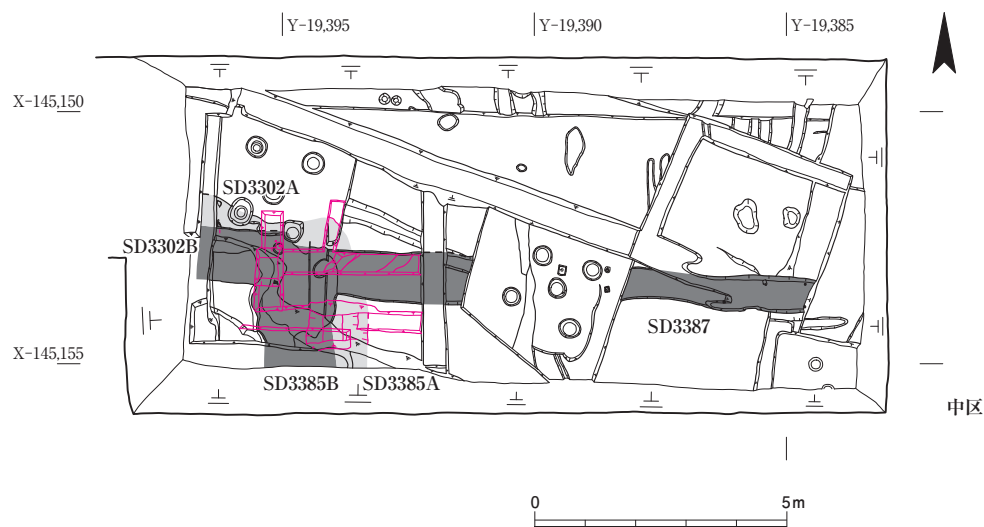


図266 第565次調査 中区・南区遺構図・土層図 1 : 150

階のSD3385Aは幅1.1m以上、深さ約0.5mで埋土は灰黄色砂である。さらにSD3385A埋土と一連の灰色砂（0.2～0.4m）が堆積した後、新段階のSD3385Bを掘削する。SD3385Bは幅1.4m以上、深さ約0.4mで埋土は黄灰色砂質土である。

一条南大路南側溝SD3302 南肩は削平されている。新古2時期を確認した。古段階のSD3302Aは幅1m以上、深さ約0.3mで埋土は黄灰色砂。SD3302A埋土と一連の灰色砂（0.2～0.4m）が堆積した後、新段階のSD3302Bを掘削する。SD3302Bは幅0.7m以上、深さ約0.5mで埋土は黄灰色砂質土である。

東西溝SD3387 西一坊大路の路面上を横断する東西溝。灰色砂層を切り込み、SD3385BとSD3302Bの合流点にT字状に接続する。幅0.7～1.0m、深さ約0.2mで埋土は黄灰色砂質土。溝の両肩に0.9～1.6mの間隔で径約5cmの木杭が打たれている。第530次調査でも一部を検出し、溝肩に並行して据えられた板材を確認している。溝肩となる灰色砂の浸食を防ぐための護岸と考えられる。

黒色土盛土 第530次調査でも検出した一条南大路の路盤となる盛土。上面の標高は67.3m前後である。

南 区

西一坊大路西側溝SD3385 中区と同様、新古2時期を確認した。古段階のSD3385Aは二段掘りの断面形状を呈し、上段幅約1.5m、下段幅約0.9m、深さ約0.8mである。埋土は灰色砂質土。この溝を埋め立てた後、大路部分を褐色砂質土で整地をおこない、新段階の溝を掘削する。埋め立てに際して、6710A型式（Ⅲ-2期）の軒平瓦や軸摺り穴をもつ花崗岩製礎石などが廃棄されていた

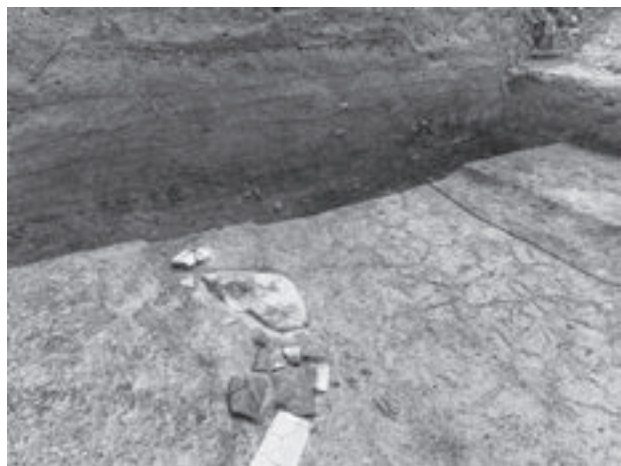


図267 南北溝SD3385礎石・瓦出土状況 北東から

（図267）。新段階のSD3385Bは溝心をやや西にずらしており、幅約2.1m、深さ約0.3mで埋土は褐灰色砂質土である。

黒色土盛土・敷粗朶 第530次調査では一条南大路の下で路床の地盤改良を目的とする敷粗朶および路盤となる黒色土盛土を検出していたが、これが西一坊大路までおよんでいたことがあきらかになった。黒色土盛土は厚さ0.4～0.5mで青灰色粘土ブロックを多く含む土とあまり含まない土とを互層状に積み重ねている。上面の標高は約67.1m。敷粗朶は黒色土盛土下に施しており、径2～3cmの枝を葉が付いたまま南北方向に揃えるように敷き並べている。第530次調査の上層敷粗朶にあたる。上面の標高は66.6～66.7mである。

4 出土遺物

土 器 調査区全体から整理用コンテナ12箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代の須恵器・土師器を中心とし、一部古墳時代や中世の土器を含む。

北区沼状堆積SX3219出土の土器を図示した（図268）。1・3が下層からの出土、他は上層からの出土である。須恵器杯Bは器高に高・低がある。1は底部を転用硯として再利用する。皿C（3）は平坦な底部から短い口縁部が外方へ直線的に立ち上がる。土師器杯A（4・5）は内面に暗文はみられない。4は口縁部が直立気味に立ち上がり、外面をb0手法で調整する。5は緩やかに口縁部が立ち上がり、外面をb1手法で調整する。杯B（6）は器高が低く、口縁部が開き気味で底部縁辺に低い高台を貼り付ける。皿A（7～9）は口径17cm前後である。器面が剥落しており外面調整は不明である。SX3219出土の土器は上層・下層での明確な時期差を見出しがたいものの、奈良時代中頃～後半の土器の特徴を示す。

このほか、中区SD3387からは図示し得ないが奈良時代の土師器杯A片や須恵器杯B蓋片が出土し、中・南区のSD3385（西一坊大路西側溝）からは奈良時代に属する須恵器・土師器が少量出土した。（小田裕樹）

瓦 調査区全体から遺物整理用コンテナ44箱分の瓦が出土した（表43）。そのうち、3割が北区から出土し、6割が中区から、南区からは1割程度しか出土しなかった。出土した瓦の時期は奈良時代全般にわたり、その傾向については判然としない。（林 正憲）

石器・石製品 図269の1は台形状石器。サヌカイトの

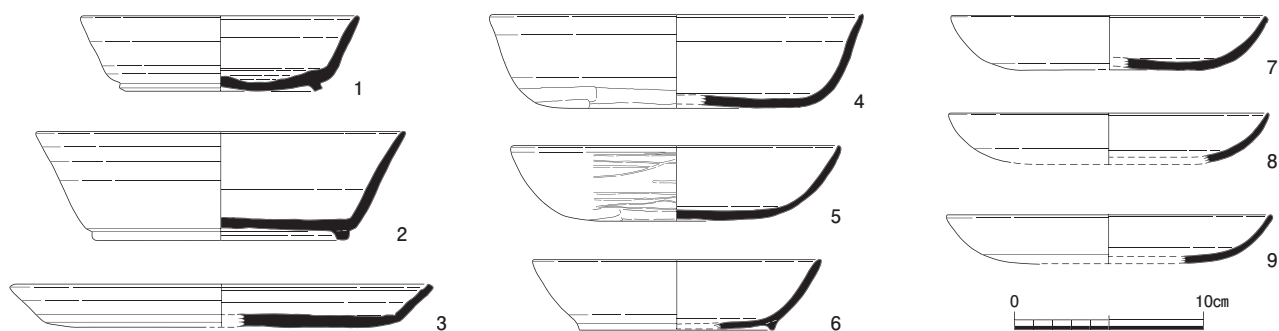


図268 第565次調査北区SX3219出土土器 1 : 4

表43 第565次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6225	?	1	6643	C	1	軒瓦(奈良 丸平不明)	1
6284	B	1	6647	D	1	平瓦(刻印)	1
6304	A	1	6663	Cb	1	伏間瓦	2
型式不明(奈良)		2		C	2	礎石	1
時代不明		1		?	2		
			6664	H	1		
				I	4		
				K	1		
			6666	A	1		
			6682	D	1		
			6710	A	1		
			型式不明(奈良)		7		
			時代不明		1		
軒丸瓦計		6	軒平瓦計		24	その他計	
丸瓦			平瓦			凝灰岩	レンガ
重量		42.657kg			168.402kg	0	0
点数		568			3758	0	0

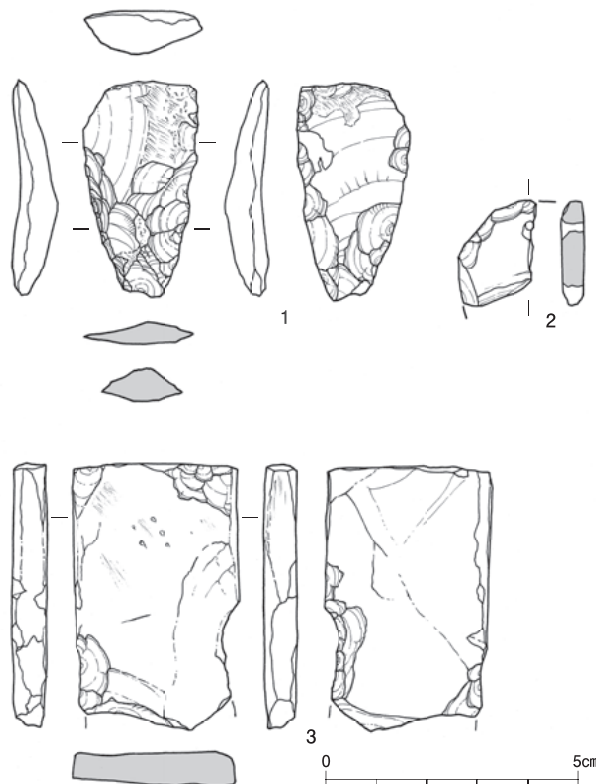


図269 第565次調査出土石器・石製品 2 : 3

縦長剥片を利用して、縁辺から背腹両面に加工を施し、特に基部とみられる下方の加工が丁寧である。刃部とみられる上部縁辺に加工痕はほとんど認められないが研磨痕が観察できる。形態や二次加工は旧石器時代の台形様石器に類似するが、風化が弱いため別名称とした。北区包含層出土。2は有孔円盤片。板状の緑色片岩の周囲を弧状に加工し、中央やや上よりに径1mmの小孔を穿つ。大きく欠損し4分の1程度が残存する。北区SX3219下層出土。3は砥石。シルト岩の板状素材を用い、上端縁辺に加工痕を有する。表裏面および右側面に擦痕が認められる。下部を欠損する。北区SD3393出土。(芝康次郎)

木簡 南区の黒色土から削屑1点が出土した。2文字分の墨痕が認められるが、判読できない。(桑田訓也)

5 まとめ

佐伯門西南方の大路側溝の変遷 中区・南区の所見から、佐伯門西南方における一条南大路南側溝と西一坊大路西側溝は、①：幅1.5m前後で逆L字状に接続する段階、②：①の側溝が埋没し、灰色砂層が堆積する段階、③：灰色砂層を切り込む幅2m前後の側溝と東西溝SD3387を新たに掘削しT字状に接続する段階、という3段階の変遷を経たことがあきらかになった。

特に、③段階には灰色砂層の堆積にともなう大路のか

さ上げと東西溝SD3387の新規掘削による排水体系の再整備がおこなわれており、大規模な修繕工事がおこなわれたことがうかがえる。『紀要 2016』でも指摘された奈良時代後半の一条南大路の再整備の実態を示すとともに、佐伯門前および一条南大路の空間の重要性があらためて認識された。

右京一条二坊四坪の土地利用 北区の所見から、右京一条二坊四坪では秋篠川旧流路に由来する沼状堆積が確認でき、この埋め立てが平城京造営期よりも降ることがあきらかになった。一方、北区東部では小規模な柱穴を検出するにとどまっており、調査区付近での奈良時代の遺構の展開は希薄である。平城京造営直後の四坪の土地利用は、旧流路に起因して坪の一部を利用するのみであったとみられ、その後、埋立て・整地と坪全体の利用へと推移していったものと考えられる。(小田)